

唐末動乱期の洛陽と韋莊

中尾健一郎

韋莊（八三六～九一〇）、字は端己、京兆杜陵の人である。^① 晩唐から五代の頃の詩人であり、その端麗な詞は温庭筠の詞と共に『花間集』に収められている。^② その経歴をたどれば、長安で幼年時代を過ごし、長じては長安の他に下邳（現在の陝西省渭南市）をはじめとする陝西・河南の各地に居住した。若年より科挙に応じたが及第せず、僖宗の広明元年（八八〇）、四十五歳の時、黄巢の乱に巻き込まれ、賊軍が占領する長安で二年間過ごし、その後洛陽に脱出してさらに江南の各地を流浪した。やがて長安に戻り、景福元年（八九二）に五十九歳でようやく進士に及第して昭宗に仕えたが、晩年は蜀に拠って帝号を称した王建に宰相として仕え、七十五歳でその波乱にみちた生涯を終えている。

韋莊は本来長安の人であり、実際に長安に住んだ経験の有するが、彼の晩年に作られたと見られる次の詞には、何故か長安ではなく、洛陽を恋い慕う心情が吐露されている。

洛陽城裏春光好 洛陽城裏春光好^よ

洛陽才子他鄉老 洛陽才子 他郷に老ゆ
柳暗魏王堤 柳は暗し 魏王の堤
此時心轉迷 此の時 心転た迷ふ

桃花春水淥 桃花 春水淥^{きよ}
水上鴛鴦浴 水上 鴛鴦浴す
凝恨對殘暉 恨みを凝らして残暉に對し
憶君君不知 君を憶ふも 君知らず

この詞には、異郷の地で年老いてゆく「洛陽才子」が、洛陽を回想していることが述べられている。「洛陽才子」とは前漢の賈誼であり、ここでは韋莊自身の姿が投影されている。洛陽を回想する韋莊にとって思い出の場所は、「魏王堤」をはじめとする洛水沿岸である。柳が揺れ桃の花が咲き乱れる光景は、韋莊に深い印象を与えたと見られる。

韋莊が長安の人であるにもかかわらず、「菩薩蠻」第五首において長安ではなく洛陽の風光を慕わしいものとして詠むのは何故だろうか。この問題は、韋莊一人にとどまらず、黄巢の乱に遭遇した唐末の士人における長安・洛陽に対する心象について考える上でも甚だ重要である。また唐の首都長安が五代・北宋以降は一地方都市と化するのに対し、一方の洛陽は、北宋には西京が置かれ「士大夫の淵藪」として発展する。韋莊が長安ではなく洛陽の風光を慕ったのは、このことと関係するのではないか。以上のことを、韋莊の詩詞を読み解くことによって明らかにしたい。

一 黄巢の乱勃発時の韋莊

前述のように韋莊は、少年時代を長安で過ごした。当時の韋莊は「塗次逢李氏兄弟感旧」詩（『浣花集』補遺卷）に、「御溝西面朱門宅、記得當時好弟兄」（御溝の西面 朱門の宅、記し得たり 当時の好き兄弟）と詠むように、宮城の堀に面し、貴人の邸宅の立ち並ぶ一等地に住んでおり、また「憶昔」詩（『浣花集』卷二）に、「昔年曾向五陵遊、子夜歌清月滿樓」（昔年 曾て五陵に遊び、子夜 歌は清らかに月は楼に満つ）と詠むように、貴族高官の子弟として華やかな青春の日々を過ごした。しかし、受験を続けるうちに不惑を過ぎた頃、彼の一生を左右する事件が起こる。黄巢の乱（八七五〜八八四）である。僖宗の広明元年（八八〇）、科挙を受験するために上京した韋莊は黄巢の長安侵攻に遭遇し

た。この時の体験は、次に挙げる詩に詠まれている。

相逢俱此地 相ひ逢ひて 此の地を俱にす
 此地是何郷 此の地は是れ何れの郷ぞ
 側目不成語 目を側だてて語を成さず
 撫心空自傷 心を撫ちて空しく自ら傷む
 劍高無鳥度 劍高くして鳥の度る無く
 樹暗有兵藏 樹暗きところ兵の藏るる有り
 底事征西將 底事ぞ征西の將
 年年成洛陽 年年洛陽を成れる

（韋莊「重開中、逢蕭校書」詩、『浣花集』卷二）

これは中和二年（八八二）、黄巢が占領する長安で作られたものである。黄巢の支配下に在って自由に発言できず、いたずらに悲嘆に暮れる士人たちの様子が詠まれており、結句には唐朝の將軍が洛陽に駐屯し、長安を奪還しようとしないうちに對する憤りが表されている。この後、長安を脱出して洛陽に逃れた韋莊は、やはり征西の兵を起こそうとしない洛陽の軍隊を次のように批判している。

漢皇無事暫遊汾 漢皇 無事にして暫く遊汾（蒙塵）し
 底處狐狸嘯作羣 底處にか 狐狸嘯きて群を作す
 夜指碧天占晉分 夜に碧天を指して晉分を占め
 曉磨孤劍望秦雲 曉に孤劍を磨きて秦雲を望む
 紅旌不卷風長急 紅旌 卷かれずして風長に急なり

畫角閑吹日又曛

画角 閑ろに吹きて日も又た曛る

止竟有征須有戰

止だ竟に征くこと有らば 須く戦うこと
有るべし

洛陽何用久屯軍

洛陽 何を用ってか久しく軍を屯めたる

(韋莊「贈戍兵」詩、『浣花集』卷三)

詩の内容は次のようである。黄巢の入寇のために僖宗は蜀の地に逃れ、長安では賊軍が我がもの顔にふるまっている。夜空の晋の地に対応する空域に妖気がかかっているのを指さし、独り剣を研ぎつつ長安の角を眺めている。軍旗は巻かれることなく風にはためき、角笛が空しく吹き鳴らされる中、日が暮れようとしている。いずれは長安に軍を進めて決戦すべきなのに、洛陽の軍隊はどうして長期間いたずらに洛陽を守るだけであるのかという。この詩を読めば、洛陽では軍隊が安逸を貪っているように見える。しかし実は乾符六年(八七九)、黄巢は長安侵攻に先んじて、時の東都留守劉元章に降伏を促し、偽官を授けて懐柔していた。③ 韋莊がそのことを知っていたか否かは定かでないが、韋莊が長安を気にかけてしたのは、自身も体験したであろう悲惨な状況が、長安ではしばしば見られたからであろう。何故なら黄巢が占領した長安の様子が、その雄篇「秦婦吟」に詠まれているからである。この詩は、黄巢の乱に際して長安に住んでいた一婦人が洛陽に逃れ、彼女が見聞した惨状を語るというものである。その一部を次に抜粋して挙げよう。

長安寂寂今何有

長安 寂寂として 今何か有る

廢市荒街麥苗秀

廢市 荒街 麥苗秀つ

採樵砍盡杏園花

採樵(村人)は斫り尽くす 杏園の花

修寨誅殘御溝柳

修寨(兵士)は誅り残ふ 御溝の柳

華軒繡幟皆銷散

華軒 繡幟 皆な銷散し

甲第朱門無一半

甲第 朱門 一半も無し

含元殿上狐兔行

含元殿上 狐兔行り

花萼樓前荊棘滿

花萼樓前 荊棘滿つ

昔時繁盛皆埋沒

昔時の繁盛 皆な埋没し

舉目淒涼無故物

目を挙げれば 淒涼として故物無し

內庫燒爲錦繡灰

内庫は焼かれて為る 錦繡の灰

天街踏盡公卿骨

天街に踏み尽くす 公卿の骨

(韋莊「秦婦吟」第一三五句〜一四六句、『浣花集』補遺卷)

この部分には、破壊しつくされ、寂寥とした長安の様子が描かれている。市街地では草が生い茂り、嘗て皇族たちが遊んだ園池では庭園の木々が伐採されている。貴族たちの飾り立てた馬車はすっかり見られなくなり、その邸宅も原型を留めていない。含元殿には狐や兔たちが跳梁し、花萼楼には荊棘が生い茂っている。繁栄していた長安の面影は跡形もなく、見慣れたものも今は目にふれることはない。宮廷の宝物庫は焼かれて、すべて灰となり、宮廷内の通路は大臣たちの屍で埋め尽くされているという。中和三年(八八三)四月に李克用が沙陀部を率いて長安に攻め寄せ

と、黄巢は長安を棄てて逃れるが、その際、宮殿には火が放たれ、回復が困難なほどの損害を被った。章莊が気にかけて長安は、実にこのような有り様だったのである。

二 洛陽における章莊

章莊が洛陽に滞在したのは、僖宗の中和三年（八八三）春から秋にかけてである。彼はこの後南方に逃れて、景福元年（八九二）に長安に戻るまで各地を転々とした。章莊が洛陽に滞在した時期は僅か半年であったが、その短い期間に彼は、美しく歴史ある洛陽の風景を目に焼きつけ、憂国の思いを絡めて詩を詠んでいる。

萬戸千門夕照邊	萬戸	千門	夕照の辺
開元時節舊風煙	開元の時節	旧風煙	
宮官試馬遊三市	宮官	馬を試みて三市に遊び	
舞女乘舟上九天	舞女	舟に乗りて九天に上る	
胡騎北來空進主	胡騎	北より来たりて空しく主を進め	
漢皇西去竟昇僊	漢皇	西に去りて竟に昇仙す	
如今父老偏垂淚	如今	父老 偏く涙を垂れ	
不見承平四十年	承平を見ざること	四十年	

（章莊「洛陽吟」、『浣花集』卷三）

この詩には、「時大駕在蜀、巢寇未平。洛中寓居、作七言」（時に大駕蜀に在り、巢寇未だ平らげられず。洛中に寓居し、七言を

作る）との自注が附されている。この詩から看取されるのは、章莊にとって洛陽は、玄宗の開元の名残を留める都市であったということである。往事は官僚たちが馬を廻らせた北市、西市、南市の三市や、宮女たちが皇帝の船遊びに伺候した洛水と伊水は、盛唐時代の繁栄を想起させるものであった。しかし、この度の黄巢の乱によって皇帝は蜀の成都に逃れ、洛陽の人々も悲嘆に暮れている。何よりも唐王朝の治世そのものが、武宗の会昌年間（八四一〜八四六）より当時に至るまで、節度使の反乱や異民族の侵入などにより、四十年にわたって平和が保たれたことはなかったというのである。ところで、洛陽の風景は次のようにも詠まれている。

春城迴首樹重重	春城に首を迴らせば	樹は重重	
立馬平原夕照中	馬を立つ	平原 夕照の中	
五鳳灰殘金翠滅	五鳳に灰は残り	金翠滅す	
六龍遊去市朝空	六龍遊び去り	市朝空し	
千年王氣浮清洛	千年の王氣	清洛に浮かび	
萬古坤靈鎮碧嵩	萬古の坤靈（地靈）	碧嵩（嵩山）を鎮む	
欲問向來陵谷事	問はんと欲す	向來 陵谷の事	
野桃無語淚華紅	野桃語るなく	華の紅きに涙す	

（章莊「北原閑眺」詩、『浣花集』卷三）

章莊が洛陽城に目をやれば、城門は焼けて飾りは失われており、天子は蒙塵して朝廷に人はいなくなっている。王者の気はい

たずらに洛水の流れに漂い、地霊が高山を治めるばかりである。唐王朝が滅亡の危機に瀕していることを思い、韋莊は空しく花を眺めながら涙を流すのである。この詩は、洛陽の荒廃した様子を詠んだものとしてしばしば引かれ、従来第三句の「五鳳に灰は残り 金翠滅す」の句は洛陽城の荒廢を指すとされている。だが洛陽城がこれによって灰燼に帰したと見るのは誤りである。「五鳳灰残」の句は、広明元年（八八〇）九月に賊將李光庭が五百人の部下を引き連れて洛陽に侵入し、安喜門を焼き、城内の市肆で略奪を行ったことを指すとされている。しかし韋莊は、この詩を作って十年後の景福元年（八九二）に洛陽を再訪し、この時作った「和集賢侯字士・分司丁侍御秋雨霽之作」詩（『浣花集』卷三）に、「洛陽秋晴夕照長、鳳樓龍闕倚清光」（洛陽秋晴れて夕照長く、鳳樓龍闕に清光倚る）と、夕陽に照らされている洛陽の宮殿を詠んでいる。つまり、李光庭の破壊行為は必ずしも洛陽全体に及んだわけではなく、少なくとも後述する長安に比べれば被害が少なかったと見るべきであろう。そうでなければ前掲「洛陽吟」に詠まれるように、韋莊が開元の御代を連想することは出来なかつたはずである。

洛陽における韋莊は、洛水の北に居住したと見られる。次に挙げる「洛北村居」詩に、その住まいが詠まれているからである。

十畝松篁百畝田 十畝の松篁 百畝の田

歸來方屬大兵年 歸來 方めて属す大兵の年

巖邊石室低臨水 巖辺の石室 低くして水に臨み
雲外嵐峯半入天 雲外の嵐峯 半ば天に入る
鳥勢去投金谷樹 鳥勢 去りて投ず 金谷の樹
鐘聲遙出上陽煙 鐘聲 遙かに出づ 上陽の煙
無人說得中興事 人の中興の事を説き得たる無く
獨倚斜暉憶仲宣 独り斜暉に倚りて仲宣を憶ふ

（韋莊「洛北村居」詩、『浣花集』卷三）

この詩の第二句に「歸來 方めて属す大兵の年」というのは、黄巢の乱のさなか韋莊が洛陽に戻ってきたことをいう。その住まいは水辺にあり、そこからは霧のかかった峯が見える。東側には金谷園へと飛んでゆく鳥の群が見え、西側には鐘の音が鳴り響く中、上陽宮で煙が上がるのが見える。まだ唐朝の中興の知らせは無く、韋莊はただ夕陽に向かい、戦乱の世にあって「登樓賦」を賦した後漢の王粲を追想するばかりである。

韋莊が洛陽で作った詩には、前に見た三首のように、夕陽を眺めながら唐朝の行く末を案じるものが見られるが、洛陽の風光の中で韋莊が想見していたのは、故国の行く末ばかりではない。そこには韋莊自身の故郷の風景もあったと見られる。

魏王堤畔草如煙 魏王堤の畔 草煙るが如し
有客傷時獨扣舷 客有り 時を傷みて独り舷を扣く
妖氣欲昏唐社稷 妖氣 唐の社稷を昏からしめんとし
夕陽空照漢山川 夕陽 空しく漢の山川を照らす

千重碧樹籠春苑 千重の碧樹 春苑を籠め

萬縷紅霞襯碧天 万縷の紅霞 碧天に襯く

家寄杜陵歸不得 家を杜陵に寄するも帰り得ず

一回迴首一潸然 一回 首を迴らせば 一たび潸然たり

(韋莊「中渡晚眺」詩、『浣花集』卷三)

韋莊はここで船に乗って船縁を叩きつつ歌を唱い、戦乱の世を嘆く。唐の社稷は潰えようとしており、そうした時勢を象徴するかのように夕陽はただ山川に残照を注ぐばかりである。多くの木々が上陽宮の宮苑を覆い、真つ赤な夕焼けが紺碧の空を染める。本来の故宅がある長安の杜陵には帰ることができず、西の方を眺めやると涙が止めどなく流れるという。韋莊は洛陽屈指の景勝地にあつて、国都長安そして祖先ゆかりの地である杜陵を思い、やがて帰還できる日を待ち侘びていたと見られる。そしてその望みが叶うのは、これよりおよそ十年後のことである。

三 長安への帰還

昭宗の乾寧元年（八九四）、一昨年より上京していた韋莊は、五十九歳で応じた四度目の試験によってようやく進士科に及第した。だが不運にも翌年に鳳翔節度使李茂貞、邠寧節度使王行瑜、華州刺史韓建が兵を率いて再び長安に入城し、騒乱となった。民衆は各処に逃散し、昭宗自身も長安城外へと避難しなければならなかった。さらにこの機に乗じて李克用（後の後唐の太祖）が長

安に侵攻し、都城は荒廢した。この時の長安の様子は、韓偓次の詩に生々しく描写されている。

狂童容易犯金門 狂童 容易に金門を犯し

比屋齊人作旅魂 比屋 人齊しく旅魂と作る

夜戸不扃生茂草 夜戸 扃されずして茂草生じ

春渠自溢浸荒園 春渠 自ら溢れて荒園を浸す

關中忽見屯邊卒 關中 忽ち辺卒の屯するを見

塞外翻聞有漢村 塞外に翻って漢村有るを聞く

堪恨無情清渭水 恨むに堪へたり 無情なる清渭の水

渺茫依舊遶秦原 渺茫 旧に依りて秦原を遶るを

(韓偓「乱後、却至近甸有感」詩、『韓内翰別集』、四部叢刊初編所収)

この詩の内容は次のようなものである。乱兵が宮門に侵入し、並び立つ家々に住んでいた人々は旅の空の下にいる。空き家となった建物には鍵も掛けられず雑草がはびこり、水路の水は溢れて荒れはてた庭園を水浸しにしている。ここは天子の住まう都であるのに辺境の兵士が群集し、却って辺境の地に漢族の住む村があると聞く。人の世はすっかり様変わりしてしまったというのに、恨めしいことに渭水は無情にも以前と同じように流れている。「清渭水」は杜甫の「秦州雜詩」二十首・其一（『杜詩詳注』卷七）に「清渭無情極、愁時獨向東」（清渭 無情の極みなり、愁時 独り東に向かふ）とあるのを踏まえ、関中の荒廢を表す。

この時期に長安が度々戦災を被ったことは、『資治通鑑』の乾寧二年の条にしばしば記述されている。例を挙げれば、昭宗の乾寧二年（八九五）七月の条に、「時宮室焚毀、未暇完葺。上寓居尚書省、百官往往無袍笏僕馬。」（時に宮室焚毀し、未だ完て葺むるに暇あらず。上、尚書省に寓居し、百官往往にして袍笏僕馬無し）と記されているように、皇宮が焼失していたために昭宗は尚書省に仮寓し、文武百官は殆ど身ひとつのままで朝政に携わらねばならなかった。同年十月、ようやく皇宮の修理が完成し、昭宗は内裏に戻ることができたが、翌乾寧三年（八九六）七月、またしても李茂貞の長安侵攻に遭い、「茂貞遂入長安、自中和以來所葺宮室、市肆、燔燒俱盡。」（茂貞、遂に長安に入り、中和より以來、葺むる所の宮室、市肆、燔燒して俱に尽く）と記されるように、中和元年（八八一）以來、黄巢の乱を始めとする一連の動乱の中で、焼け落ちるたびに再建されてきた長安の宮室及び東西の両市は、共に灰燼に帰したのである。

韋莊が帰還した長安は上述のような様子であった。乾寧元年（八九四）進士に及第した韋莊は、左拾遺、補闕を歴任し、昭宗に扈從して行在を渡り歩いている。韋莊がこうした困難な時勢にありながらも昭宗に付き従っていたのは、彼がその繊細な詞からは窺うことのできない剛直な一面を有していたからである。「関河道中」詩（『浣花集』卷一）には、「平生志業匡堯舜、又擬滄浪學釣翁（平生の志業、堯舜を匡げんとし、又た滄浪に釣翁に学ば

んと擬す）」と詠まれており、この二句から天下が乱れているため世に出るに至っていないが、韋莊は本来皇帝を補佐せんとする志を秘めていたことが看取される。また「塗次逢李氏兄弟感旧」詩（『浣花集』補遺卷）に見える「今日相逢俱老大、憂家憂國盡公卿（今日相ひ逢ふは俱て老大、家を憂ひ國を憂ふは尽く公卿）」の二句からも窺われるように、韋莊その人は本来憂國の士であった。彼の憂國の情は、前出の洛陽時代に詠まれた詩に見えるところである。ところが韋莊は、昭宗の天復元年（九〇一）に西川節度使王建の掌書記に應じて成都に赴任し、その晩年には王建が建てた前蜀の宰相を拝してその生涯を終えることになる。憂國の士であった韋莊が王建の幕下に入ったのは何故だろうか。その事情を付度するに、韋莊の理想と現実との齟齬が考えられる。

韋莊は「題安定張使君」詩（『浣花集』卷三）において、「中興若繼開元事、堪向龍池作近臣」（中興して若し開元の事を継がば、龍池に近臣と作るに堪へん）と詠み、もし唐朝の中興が成し遂げられれば、皇帝の侍臣となったであろうにと、張使君に同情の意を表している。これを見ると韋莊の理想とする治世は、玄宗の開元年間であったことが分かるが、彼が仕えた昭宗は中興の君主となり得ない人物であった。昭宗の人柄は、『新唐書』に次のように見える。

昭宗爲人明雋。初亦有志於興復。而外患已成、内無賢佐。頗亦慨然思得非常之材、而用匪其人、徒以益亂。

昭宗、人となりは明雋なり。初め亦た興復を志す有り。而れども外患已に成り、内に賢佐無し。頗る亦た慨然として非常の材（人材）を得んことを思ひて、用ふるところは其の人に匪ざれば、徒に以て乱を益すのみ。

〔新唐書〕卷一〇、「昭宗紀」贊

「昭宗紀」の贊に拠れば、昭宗は唐朝の復興を志しながらも、内憂外患に加えて難局を乗り切るのに必要な人材を任用することができず、朝政は混乱を増したという。一方韋莊といえは、「寓言」詩（『浣花集』卷四）に、「爲儒逢世亂、吾道欲何之。學劍已應晚。歸山今又遲」（儒と爲りて世亂に逢ひ、吾が道 何く之にかんと欲す。劍を学ぶは已に応に晩かるべし。山に帰るも今又た遅し）と詠むように、出仕して儒家としての志を遂げることが強く望んでいた。それにもかかわらず朝廷より与えられたのは左拾遺（従八品）、補闕（従七品）であり、諫官の要職とはいえず、それらの官位は「堯舜を匡けん」とする志を果たすには不十分なものであった。それに加えて、韋莊の故郷杜陵を含む長安の惨状は目に余るものがあったと見られる（後述）。長安にて昭宗に扈從し、如何ともすべくもない現実を直面した韋莊にとって、将来の展望が開けないまま長安に住み続けることは、甚だ苦痛を伴うものではなかったか。

第一節には「菩薩蛮」第五首を引用し、韋莊が洛陽の美しい風景を想起していることを述べたが、実は彼は長安についても同じ

唐末動乱期の洛陽と韋莊

く「菩薩蛮」詞に詠んでいる。

人人盡說江南好

人人 尽く説く 江南の好きを

遊人只合江南老

遊人 只だ合に江南に老ゆべし

春水碧於天

春水 天より碧く

畫船聽雨眠

画船に雨を聴きて眠る

鑪邊人似月

鑪邊 人は月の似く

皓腕凝雙雪

皓腕 双雪を凝らす

未老莫還鄉

未だ老いざれば 郷に還ること莫かれ

還鄉須斷腸

郷に還れば須く断腸すべし

〔韋莊「菩薩蛮」五首・其二、「花間集」卷二〕

この詞の制作年代は不明であるが、一説では、これは江南での放浪していた頃の韋莊は、「一杯今日酒、萬里故郷心（一杯今日の酒、万里 故郷の心）」（婺州水館重陽日作」詩、『浣花集』卷七）、「西望長安白日遙、半年無事駐蘭橈（西のかた長安を望めば白日遙かなり、半年事無くして蘭橈を駐む）」（「江行西望」詩、『浣花集』卷上）と詠むように、江南に在りながら長安への帰還を切望していたからである。

しかし長安に戻った韋莊が目あたりにした光景は、「菩薩蛮」第二首の後闕第四句に「郷に還れば 須く断腸すべし」と詠まれるように、韋莊をして断腸の思いを抱かせるものであったよう

である。事実、乾寧四年（八九七）に作られた詩には、往事の痕跡を留めぬ長安の街並みが次のように詠まれている。

満目牆匡春草深　　満目の牆匡　春草深く
 傷時傷事更傷心　　時を傷み　事を傷み　更に心を傷ましむ
 車輪馬跡今何在　　車輪　馬跡　今何くにか在る
 十二玉樓無處尋　　十二玉樓　尋ぬる処無し

（韋莊「長安旧里」詩、『浣花集』卷一〇）

韋莊の目にふれる坊里の垣根には、春を迎えて野草が生い茂っている。荒廢した長安を目のあたりにして、自身がこのような乱の時代に生まれあわせたことを思うと悲しみが増す。嘗ては大通りを盛んに往來していた車馬は見る影もなく、王侯貴族で賑わった樓閣も焼失してしまったために尋ねあてることができないという。初句の「春草深」とは、言うまでもなく杜甫「春望」詩の「城春草木深」の句を踏まえる。杜甫が安史の乱の際に目にしたのと同じく、長安の見るも無惨な光景は、韋莊の胸に終生焼きついて離れなかったことであろう。長安ばかりではない。後述のように韋莊の旧居があった杜陵も、戦禍に見舞われて人々が離散し、旧知の人々はいなくなっていた。このように変わり果てた長安及び杜陵の光景は、韋莊の心を甚だ悲しませるものであった。

それでは一方の洛陽はどうであったか。天佑元年（九〇四）、朱全忠に迫られ、昭宗は長安から洛陽に遷都した。それと同時に長安の宮殿と官衙及び市民の邸宅は解体されて洛陽へと運ばれた

が、それ以前から洛陽は光啓三年（八八七）より後唐・莊宗の同光四年（九二六）に至るまで河南尹を務めた張全義の治世下で着実に復興を遂げていた。さらに五代においても首都及びそれに次ぐ重要都市として注目され、北宋においては開封に次ぐ都城として存在し続けた。

ここで韋莊の「菩薩蠻」第五首の「残暉」について考えてみたい。清の陳廷焯や葉嘉瑩氏が言及するように、「凝恨對殘暉、憶君君不知（恨みを凝らして残暉に對し、君を憶ふも君知らず）」の二句には、蜀地に在って君主を恋慕する感情が吐露されたものとする見方がある。もとよりこれを牽強附会とする見方もあるが、筆者は前者の説に与したい。①というのは、韋莊の詞は詩と近い性質を有しており、②そうであれば詩における日没の光景は、唐の興廢に關連して詠まれていると考えられるからである。

辛勣曾寄玉峯前　　辛勣し　曾ち寄る玉峯の前
 一別雲溪二十年　　一たび雲溪に別れてより二十年
 三徑荒涼迷竹樹　　三徑　荒涼として竹樹に迷ひ
 四鄰凋謝變桑田　　四隣　凋へ謝りて桑田に變ず
 漢陵可是當時事　　漢陵は是れ當時の事なるべきも
 紫閣空餘舊日煙　　紫閣（終南山）は空しく旧日の煙を余す
 多少亂離無處問　　多少ぞ　亂離に問ふ処無し
 夕陽吟罷涕漣然　　夕陽に吟じ罷みて　涕漣然たり

（韋莊「過漢陵懷旧」詩、『浣花集』卷一〇）

この詩は、前に見た「長安旧里」詩と同じく乾寧四年（八九七）の作である。実はこの年は李茂貞が長安を焼き払った乾寧三年七月（八九六）の翌年でもある。蜀へ使者として赴いた帰りに、二十年ぶりに杜陵の漢殿に立ち寄った韋莊は、荒廃したその土地が夕陽に照らされる光景を見て止めどなく涙を流している。

第八句の「漣然」は、前出の「中渡晚眺」詩の「家寄杜陵歸不得、一迴迴首一漣然（家を杜陵に寄るも帰り得ず、一迴首を迴らして一たび漣然たり）」の二句に重ね合わせる事が可能である。洛陽にて切望した杜陵への帰還は、この時点で不可能なものとなっており、故郷を喪失した悲しみに、韋莊は落涙を禁じ得なかったのである。

ところで、夕陽に映る風景と時代状況を重ね合わせて慨嘆する手法は、「中渡晚眺」詩（『浣花集』巻三）の「妖氣欲昏唐社稷、夕陽空照漢山川」（妖氣 唐の社稷を昏からしめんとし、夕陽空しく漢の山川を照らす）や、「咸陽懷古」詩（『浣花集』補遺卷）の「城邊人倚夕陽樓、城上雲凝萬古愁」（城辺 人は夕陽の樓に倚り、城上 雲は万古の愁ひを凝らす）のような対句表現にも見えるものである。つまり韋莊における「夕陽」はただの夕陽ではなく、それは確かに王朝の落日なのである。ここで冒頭に挙げた、韋莊が長安の人であるにもかかわらず、「菩薩蠻」第五首において洛陽の風光を慕わしいものとして詠むのは何故かという問題に立ち返ろう。ここまで見たように、韋莊における長安は、

黄巢の乱を始めとする一連の戦禍のために荒廃した。とりわけ韋家の莊園のあった杜陵はもはや帰還すべき場所ではなくなっていた。一方、洛陽は長安に比較すれば被災の程度は少なく、風光明媚な景観を残しており、さらに都が遷されたことにより復興の機運が兆していた。そればかりでなく都城として復興せんとする洛陽では、後の後梁の太祖朱全忠によって帝位篡奪の準備が進められ、唐王朝はまさに落日の危機に瀕していた。兪平伯氏や兪陞雲氏が「菩薩蠻」第五首を評して、これには表向きは韋莊の望郷の思いが綴られているが、その骨子には故国の行く末や君主に対する思いが込められていると述べるのは、おそらく正しい。韋莊にとっての洛陽は、唐の全盛時代を想起させる風光明媚な都市であり、かつ滅びゆく唐王朝を哀惜させる土地だったのである。

おわりに

我々は洛陽において韋莊が、夕陽を眺めながら、常に唐の社稷とその行く末を案じていたことを知っている。臆断を恐れずに言うなら、「菩薩蠻」第五首の後関に「恨みを凝らして残暉に對し、君を憶ふも 君知らず」と詠まれている「君」とは、長安で苦樂を共にし、後には洛陽に移された嘗ての君主、昭宗その人を指すであろう。そして韋莊は夕陽に向かいつつ、以前に自らが仮寓した洛陽の風光明媚な景観を回想しつつも、滅亡の時を迎えようとする唐王朝に哀惜の念を注いだのである。故郷を喪失した韋莊に

とって、回想することが苦痛に感じられる長安と比べて、開元の御代を想起させる洛陽のすぐれた風光が、終生心をとらえられるものであったことは間違いない。唐末の士人にとって、少なくとも韋莊にとっての長安は、もはや帰るべき場所ではなくなっていた。だが壊滅した長安と異なり、復興を遂げつつあった洛陽は、王朝の交替と相俟って、より強い求心力をもって士人たちの注意と関心を惹きつけたと言えよう。

注

- (1) 韋莊の事跡については、聶安福『韋莊集箋校』（上海古籍出版社、二〇〇二年）附録「韋莊年譜簡編」、及び同書の詩の注釈に拠る。
- (2) 韋莊の詩の引用は『浣花集』（四部叢刊初編所収）に、詞の引用は趙崇祚『花間集』（呉昌綬、陶湘輯『景刊宋金元明本詞』〈上海古籍出版、一九八九年〉所収）に拠る。また「秦婦吟」及び『浣花集』未収の詩については、注(1)所掲『韋莊集箋校』に拠り、出処を『浣花集』補遺巻」と略記する。
- (3) 『資治通鑑』卷二五三、唐紀六九、僖宗広明元年（八八〇）九月の条を参照。
- (4) 『資治通鑑』卷二五五、僖宗中和三年（八八三）四月の条に次のように見える。「甲辰、(李)克用等自光泰門入京師。黄巢力戰不勝、焚宮室遁去。」
- (5) 注(1)所掲『韋莊集箋校』、「北原閑眺」詩の注二を参照。
- (6) 韋莊が「黄巢の乱」以前に洛陽に居住したことを示す史料は見あたらない。しかし洛陽の西方に位置する虢州（現在の河南省靈宝県）に韋家の別墅が構えられていたことから、過去に彼が洛陽を訪問する機会があったと見られる。
- (7) 『資治通鑑』卷二六〇、唐紀七六、昭宗乾寧二年（八九五）七月の条を参照。
- (8) 『資治通鑑』卷二六〇、唐紀七六、昭宗乾寧三年（八九六）七月の条を参照。
- (9) 葉嘉瑩「從《人間詞話》看温韋馮李四家詞的風格」（《迦陵論詞叢稿》、上海古籍出版社、一九八〇年、六一頁）を参照。江南で故郷を懐かしんだ韋莊が、故郷に帰ることを断念した後、回想した江南の地は、老境にある現在と比べたなら楽しい思い出の残る土地であったと言える。そのように考えれば、やはり「菩薩蛮」第一首は、第五首と同様に、蜀地にて江南を放浪した過去を回想しながら作られたものと見なすことができるだろう。なお「菩薩蛮」五首の成立時期については、山本敏雄「韋莊詞小考」（《愛知教育大学研究報告》第三三輯、一九八四年）に先行研究の整理がなされており、結局のところ確実な証拠がないので、先行する諸説は決定性に欠けるとされている。しかし近年刊行された張美麗『韋莊詞研究』（中国社会科学出版社、二〇一〇年）において、「菩薩蛮」五首を含む韋莊の大部分の詞は蜀地において作られたことが当時の政治状況と関連づけながら論証されている（一八九〜一九六頁）。本稿では、張氏の説に左袒したい。
- (10) 該当する原文は次のとおり。「壬戌、車駕發長安、全忠以其

將張延範爲御營使、毀長安宮室百司及民間廬舍、取其材、浮渭沿河而下。長安自此遂丘墟矣。(『資治通鑑』卷二六四、唐紀八〇、昭宗天祐元年(九〇四)正月の条)

(11) 原文は次のとおり。「端己『菩薩蠻』二云、『未老莫還鄉』『還鄉須斷腸』。又云『凝恨對殘暉、憶君君不知』。(中略)皆留蜀後思君之辭。時中原鼎沸、欲歸不能。端己人品未爲高、然其情亦可哀矣。」(陳延焯『白雨齋詞話』卷一、人民文學出版社、一九五九年)。「如果以中國詩歌一貫習用的託喻的想法來看、則「日」之爲物、一向乃是朝廷君主之象喻、而今端己乃用了「殘暉」二字、則當時朝廷國事之有足哀者也可以說是意在言外了。而且如果以史實牽附立說、則昭宗之被脅遷洛陽、唐朝國祚之已瀕於落日殘暉可知。」(注9)所揭葉氏論文、七〇頁)。

(12) 岡崎俊夫「洛陽才子他鄉老——詞人韋莊のことども」(中國文學研究会『中國文學月報』第四九号、一九三九年。一九七一年に汲古書院より影印発行)、一七頁を参照。また村上哲見『宋詞研究 唐五代北宋篇』(創文社、一九七六年、上篇第三章「五代詞論」、一四五頁)にも、「韋端己の詞には、士大夫としての境遇、もしくはその中における士大夫的な心情が、かなり濃厚に、あるいは直接的に表されており、その点において温飛卿の詞と質を異にする。」と述べられている。あるいは、「詞を詩と同じように歴史を反映する資料として用いて良いのか」と見るむきもあるかもしれない。しかし韋莊より少し後の時代の詞人である南唐の後主李煜の詞が、「破陣子(四十年來家國)」や「浪淘沙令(簾外雨潺潺)」のように南唐の滅亡という歴史的背景をもとに解釈されるのが通例であることなどを勘案すれ

ば、前掲岡崎氏や村上氏の諸説に述べられているように、韋莊において詩と詞の境界はそれほど分明ではないと言える。よって唐朝の滅亡に対する感情の表出という点において、韋莊の詩と詞が共通する要素を有すると見ても、あながち誤りではないと筆者は考える。

(13) 該当する原文は次のとおり。「其實端己此詞、表面上看是故鄉之思、骨子裏說是故國之思。(中略)更進一步說、不僅有故國之思也、且兼有興亡治亂之感焉。」(俞平伯『說詞偶得』、香港万里書店、一九五九年、一六頁)。「洛地風景、爲唐初以來都城勝處、魏堤柳色、回首依依。結句言『憶君君不知』者、言君門萬里、不知羈臣戀主之忱也。」(俞陛雲『唐五代兩宋詞選釈』、上海古籍出版社、一九八五年、四八頁)。